



溫故目錄

四

安志



5
2209
3



明 利 5
9.200
3



温故日録卷第七

文月

初凉

新式月令立秋涼風至云云 新拾遺秋上
早凉知秋といふ事也

残暑

身入

うほり香れ力あじりも秋也 流布 初秋也但
初中後より用事あり身も志も秋也

冷

云云初秋也暮秋の时分いづり 流布 涸終
あゝといふ堀河次郎百首は風ひやうをうと
もよあり



扇置

為秋事可依也 新式 如此おもしろも只秋
下流布 垂と云字之向中よあまハ秋也 師説

弁扇

扇と指と云も秋也 言白筑州へ御下向乃
餞別は宗養とて百韻は言伊也

七夕

扇只思ひすも可くもていあそくささころハ秋の
神代より七月七日夕と契て牽牛と織女と
かり星わひを月つりてほつら説ありハ雲下略

乞巧奠

立庭徽 像盤水星 願絲
キツカウニツリ 先七日をんハ益人伊てごごりハ拭
入て乞巧奠あり御殿乃庭はほくえ四きやくとと
と灯臺九本とめく灯あり机の上は色く物す
るり筆はこらとて是とてほくえの上火とり
よ夜とてくたく多れをれあり夕のひもあは入
大さしれ星はほくとてらふ三は様ありつハ盤一き

調半品半律 あまれちくなり是ハ秘事とて傳ふを
ちく人すくゆ 觸穢乃とれを猶行りる天平勝寶
七年よとてあるむわらそきハ牽牛織女とてハの
一ハあひあはれハ鳥鵲あまれ河はこくしてはるさ
乃ハ橋となして織女はこくはるハ南子に書
よとて又續齊諧記よ云桂陽城乃武丁とつハ
一人仙道とて弟よかりていこく七月七日ハ織女
河とつて事とて身とていくなやハ渡也といハ
をれハ織女ありハ牽牛ハ諸すこととて是ハ織
女牽牛乃とてハあまれと世人ハ傳つて乞巧といハ
事とてハより事ハこれハ七夕祭とも云也香花と
そとて供具とて乃て庭上ハゆりてをささるハ
くハあまらハ糸とかきく一事といハ三年ハ内
よ必叶といハこのゆハ乞巧と也郝隆ハ腹中乃

二

よりのし紅雲紙橋よ舟よをくつ本文あまの舟と
〜と詠一 流布

天河

天河のあふ瀬なり又舟はひるひくも非水邊
也夜分は五句也又天河は二星はなを

まに 句よより名取也水邊也難也河州はあり逢瀬を

と少し星はあり〜らひあふふ勿論秋也 流布

年渡

一年は二度銀河と〜心なり後撰秋よ
むろ〜ぬぬわ〜れ〜のり〜らハム一秋の

日 ちりりきん云の紫今か〜と〜らよよりの

梶葉書哥

是ハ此國ハ風俗ハ七夕ハ哥とよ〜
此葉の露と硯と滴て梶はかくなり

後拾遺

天河の河と〜る毎はらの紫よおり〜事と〜か〜
七夕はこ〜る舟の〜は〜ふ〜秋は〜の玉は〜

草は〜の露と〜と鈴の玉は〜軒は〜ら〜は〜

か〜と〜る〜ハ新勅撰家隆ハ哥也

梶とわ草は露と〜の鈴 宗祇

秋去衣

七夕は具也 新式 万葉十赤人哥云

七夕の〜と〜る〜ぬ〜あ〜衣〜と〜ら〜ん

神代は令天棚機姫神織神衣所謂和衣古語拾遺

よ〜と〜朗詠去衣曳浪霞應濕行燭浸流月

欲消〜作〜是也詩の〜と〜去衣とハ七夕去

時代衣也天川よ〜と〜は〜び〜成七夕乃〜と〜

引か〜と〜下向行燭と〜道行と〜と〜す火なり

續松〜と〜天河よ〜と〜是ハ七夕は續松

乃流水ふ〜と〜消〜と〜云也火よ〜と〜八月欲消

と云也曳浪浸流ハ河と渡意也

星合 星祭 星手向 星契 二星

牽牛ヒコウ 順倭名ニヒコ 比古保之ヒコホ
又イヌ 奴加比保之

妻メ 迎舟ムカヒフネ 萬葉第八

牽牛ヒコウ 乃ハ 舟フネ 此コノ 河原カハ 乃ハ 勢セ 此コノ 妻メ 乃ハ 渡ワタ 直ナ 舟フネ
おゆハ 乃ハ 勢セ 此コノ 妻メ 乃ハ 渡ワタ 直ナ 舟フネ
こゝろハ 乃ハ 勢セ 此コノ 妻メ 乃ハ 渡ワタ 直ナ 舟フネ
かゝル 乃ハ 勢セ 此コノ 妻メ 乃ハ 渡ワタ 直ナ 舟フネ

妻越舟 彦星妻喚舟 万葉十彦星乃渡直舟
ともし万葉よあり

妻送舟 新撰六帖 後朝乃哥云光俊

玉祭 玉佐可介祭 孟蘭盆とて一祀をせしむる事あり
儀式公事根源云内蔵寮御孟供とてある書御

座乃南北同は菅原座一物成發て主上爰を御拜
ありと幻主此時ハナリ 天平五年七月よげり 免る

孟蘭盆と大膳職は持あることなり孟蘭盆ハ梵語也
倒懸救器ニ翻譯寸倒懸ハさうふからると云ん
餓鬼乃さうふからると云んハさうふからると云ん
救器ハ此餓鬼乃若とすうふからると云ん佛子目
連乃さうふからると云んハさうふからると云ん
中よさうふからると云んハさうふからると云ん
とすうふからると云んハさうふからると云ん
を供養せし解脫とんと説く一より孟蘭盆經ハ
乃さうふからると云んハさうふからると云ん
山乃さうふからると云んハさうふからると云ん
すうふからると云んハさうふからると云ん
蘭盆經ニ委なり人のいせぬこと事ハ年ハ六度
なり報恩經ハ入はすうふからると云ん
乃さうふからると云んハさうふからると云ん

乃のつふ事りて十六日此午の時よゆる由ゆる

相撲使 是ハ諸國此供御人とりあつて七月は相

撲節 ヒチチ 天子此侍後とる事先十

六日此ありしは御あり上心勅と奉て左右の次將

は相撲あることよりとりおほせしは左右此近衛方

とつけて國へ使をとつて相撲をたは是と万葉

とことり使とり也 ツカヒ 二十六日此内取こと事主上

仁壽殿母出御する ツカヒ 左右此相撲人憤鼻のふり

御きぬえぬとさして ツカヒ 天皇南殿小出御なる公參上す大

將相撲奏とさし十七番とりて勝乃方舌聲ありま

た二十九日 ツカヒ 抜出とて相撲をすむ侍後とる終り

神龜三年 ツカヒ 諸國よりりのせしは寛平

七年 ツカヒ 童相撲と侍覧ありとすく相撲のとりと

日本紀 ツカヒ 垂仁天皇七年七月此當麻乃ひびく勇

りとの名をば當麻此蹶速 ツカヒ 此角をもこ

つて天皇は由比海召て是此にふべき人と群臣よめ

此のら終り ツカヒ 出雲國母むけさおのこあり野見宿林

こりとのゆり ツカヒ と奏す則こまは終りて相撲を侍

覧 ツカヒ 野見宿林カヤまさり ツカヒ 蹶速 ツカヒ たり

ち ツカヒ きて ツカヒ ち ツカヒ ち ツカヒ 是 ツカヒ 是 ツカヒ 是 ツカヒ 是

公事根源 称名院侍説は供御人

粟津 ツカヒ 今 ツカヒ 今 ツカヒ 今 ツカヒ 今 ツカヒ 今

多 ツカヒ 多 ツカヒ 多 ツカヒ 多 ツカヒ 多 ツカヒ 多

事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事

事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事

事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事

事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事

事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事

事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事

事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事

事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事

事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事

事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事

事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事

事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事

事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事 ツカヒ 事

よこせ 同注
こころげくひれ字使也番めあらずかりび
ぬぐふ小取番。相撲番に書ハ相撲とけふ事たり
とまはぬぐく。げがひぬけ乃清濁
也藻塩草よこころけくひれ

新綿 すすりぬぐくしれぬ。乃あわさる。根のむれをぬぐん
新撰六帖為家哥也あわさる。七月十六日也内裏の
川きり綿也。藻塩草但本説
不詳或ハ九月こ也可隨。巫好秋

鶏坂祭 廿三日 鶏坂杖
いふまじりさうれ森よんすし。志りれ敷。志りぬ力は
俊頼抄ニ云是ハ越中國持切此明神乃祭ハ日龍眼
木乃答。とし女れ男志る。敷めあさうひく女と敷。志り
其れハ孫さふ。醫とゆせて。黙祿宜杖と持く。敷地
と多う。女耻てわ。日。忽神。罰とけ。う。と。か。や

かの祭とハ志。と。と。の祭とぬん云。傳。り。但古哥の足
え。の。自。の。哥。を。書。て。傳。る。也。云。云。八。雲。御。抄。大。概。同。之。

三泥山祭 大七日たりみさふ。持。この時乃事たり。や
ゆ。な。と。い。祭。め。け。る。かり屋乃事たり

穂屋作 穂屋作。信濃御。謝山乃。ま。け。り。ハ。薄
程は皆す。れ。の。穂。と。つ。く。也。云。云。玉葉集。金判
盛久哥

尾花。く。や。れ。免。ら。ら。二。ひ。再。志。り。里。あ。ら。あ。記。の。こ。こ。ふ
支木。為。相。哥。云
丁。あ。う。ち。や。れ。れ。も。れ。は。こ。か。た。あ。ひ。は。林。の。あ。う。と。ん

初嵐 秋也初
風。難。也

露 三月よりくるすらく四季は用る
物なれども秋はうらたなり
波 袖

泪 思 泪此 心 詞

霧 三月よりくる蝶とむしとくも虫と
心 秋也
胸 秋也
心 秋也

折越とさ 心 香 秋もきりふ
流布 也秋也 秋もきりふ

式は嫌香此煙云説いりきり母も香ある也 流布 霧
不断焼香と詩より地味るは只ゆたのさなり事也

海 非水邊 心 香 秋もきりふ
新式 祈之居取母打越嫌なり

立人 今かこはれをいれ 方なれどもきり立人といふ

従妻 秋かり夜分也 猶先ハ難也夜分
よもあすなかりは嫌也 流布

律調 ありあり

一葉 一葉散只一葉こころり云て初秋乃事なり七月十八日
日すていつくさるるも月此あるを了すそもふ苦と

流布 一葉ハ桐也書 船 衣

桐 桐此落葉只桐も秋也 新式 淮南子梧桐下葉落天
下知秋といへ立秋乃目よりす

柳散 初秋也先柳桐をくよりちりちりするもの 流布
すく名木散いつくさるる秋たりとれぬ速ちり

黄柳 秋の柳也

楸 こくろりも秋也 新式
秋也 流布 初秋は用也 新式抄

瀆 万葉第 十一小

波島より見ゆらうしは瀆久本久くはらぬ雲ふあはるて
こころ今業云は哥拾遺第十四もは瀆ひえ記とあり
下句看よあはるてと入あり伊勢物語はは瀆ひえ
とあり又下乃句看ふあひとてと入あり八雲御抄
よひえこ云非説なり云云瀆母ある楸なり瀆萩
たし云うとては物語としてひえこいつる所は惟清抄
云瀆ひえハ愚見抄ハ瀆ある家と云へ一首
鹿板鹿なご云がとて定家卿庭上冬菘と
云題しとて
表とるぬ南の海のとぬびとく久くある秋れあはる
は哥ハ瀆此家の心あり祢題乃庭の文字落題よ
かる也云云師説ハあはる記砂のあはるのうげとて

グひえのしとては瀆鹿こころなり 瀆疑抄ハ此家
の哥ハは物抄本哥とせり又ハ物語のしとてひえ
と後いさ記とせりとてありとありとてとてとて
哥もろろとてとてとてとてとてとてとてとてとて
今業云瀆ひえハ愚見抄ハ二説ありといつら一説ハ
瀆もは砂の塩はひえれとせりとてとてとてとてとて
ひえれとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
鹿のしとてとてハ瀆鹿こ云也又一説ハ一首鹿板鹿
云やん海郎の家居ハ瀆はえゆるといふとたり捨
る草ハ定家卿後鳥羽院慈野清事乃抄伴
よまわりて新宮三首ハ哥の中ハ庭上久菘と云
題してとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
本哥とせりとてとてとてとてとてとてとてとてとて
説人の好むとてとてとてとてとてとてとてとてとて

平あまは家此家と用也一といつらひとのわつらひ
漢此江定家心も漢ははる家居の事とあせり
まごころこころ祇注もこれ好むをたれ汗の砂の
新古今才十三六
い川にれく塩屋あまは昔庇久くくならぬあまは好むは
これとい物院の哥よりいづききりやあらん

新式云濱庇 有説依句
可嫌居屋也 可嫌打越物所中かひり
全言抄云彼のよせくま砂のひさし母のさかひ
見まご漢ははる小家とてふたり白ふくく一然

者居取み打越嫌ゆり但句れあそそめよりてあ
可嫌くや一説有之定家卿の哥霜をとぬ南の
海のとぬしきくといふ哥よといふく居所よみち也

こ武抄物よいつら云云新式増抄云大略居所よみち
たり但もぬれ洲の下崩てひさし乃やよきうら

いハ打越なりとて一多ハ漢よあらんひさしハみち也然則依句
と也或抄云とては居取み打越と嫌今ハ五句云云云
楸の事ハさてをたれりなふ事とあらんハかの

傍題とるんれあむひさきご以次よあらん
ちくも秋と初秋とあるれ也 師説惣一
てそそのあみ衆はうすれ事よひあらんこり

柞

よんそと只柞のあれ
一原名

可といつらわたり
諸木よりくく

榿

こまごつらり

女即花

花如蒸栗也萬葉集ニ女
倍芝をく本日本文未詳

牽牛花

是ハ曉ひきて朝日よ志はくく萬葉朝景
こま書と藤とハ別也藤ハ真韻云木槿とあ

己禮文韻曰朝華也又字書曰槿者舜也毛詩有
女同車其顏如舜花愚謂舜朝榮夕衰花也故
毛詩倭訓呼舜曰朝顏亦不妨也由是日本俗
以為与槿蓋一共牽牛花蓋以倭訓共同是大
誤也宋人詩曰槿花箇下點秋事早有三牽
牛上竹末以此詩意見則槿舜与牽牛各
別也牽牛花此出於甲舍九人取之牽牛易
藥故以名之又或故人詩曰君子若桂性春濃
秋更繁小人槿花心朝在夕不在云

露草 月草也或曰此花八秋三月の中八日とんさ記ころ之
云袖中抄第三云月草ハ六月七月をたこと
さ記ころとんさ記ころ云或ハ八月ハ景物に入ぢあれるも
袖中抄説とんさ記ころ
鶏冠草花
七月の部とんさ記ころ

別郎花

奈この草此事とて袖中抄よおほごらとんさ記ころ
よいて花の志ろさこれおとんさ記ころの万葉才其家持哥
秋の野ふ今とてゆめよのよれむとんさ記ころ花あひんふ

桔梗

古今拾遺なとん物名よ
しりて物の名れ外味見

萩

字亦作藪 順
倭名 三月よわろ
濱 倭也 流布 此淡萩ハ蘆乃
幸ふれハ雜也穂乃ハ子色

芭蕉

霜をくくしとんさ記ころ秋
也 流布 他准之

水け草

秋也 天河よおりくくらあ説るり一よハ水影
草一母ハ水懸草也是ハ稻ちり云云万葉才亦人
天漢水影草金風靡見者時來之よきり續在テ秋上
顯昭云水け草ハちのけよおつる草を云詞を

い哥こころあつまるふもぬき人の人月まきたる奥儀
 抄云娘のばりぬれ此鷹とて鳥とそりしをそそ
 そりしをそそあつたつてふれいかりと所て初
 わく鳥たなくやいぬありそくふれぬまはりの鳥
 とそんそそ鷹たれちくる細くそそ事此あ
 ら是もそそゆくとハ也或説はこやれらら母鳥を
 こくを死てそそ鷹とて鷹とそそ事此あ
 こやれらら母鳥をそそててて鷹とそそ事此あ
 袖中抄

鳥屋出鷹

こりてそそやとらおすふら著鷹鳥とそりこり西
 園寺百首れ注み鷹鳥ハ四月八日鳥屋よ入七
 月廿日よおと也とあり定家三百首の注よハ十四日
 よ出とこりり蕪塩草ハ十六日こりり説けり

當流用所ハ十と日教ハそそこりり事ハなして只ねの
 おりのりあつたつてとやと出とそそ事此あ

初鳥狩

初鷹鳥とつひくも秋也 流布 或ハ八月鳥屋出ハ
 鷹と初てけふと初鳥狩も初鷹もそそ
 萬葉第十九 いくそそた好む記去のそ約をそ始鷹狩ふそてや別也
 小鷹狩 萬葉新点

蛸

類多れハ也順倭名云茅蛸小青蛸也云蛸蛸
 じとそそも秋なり初秋乃それこそれと木枯るそ
 よと合つて哥もゆり堀河百首み仲實朝臣
 千載秋入
 己里ハさひりらそそ木枯れ吹夕そそ日そそ

虫

三月

松虫 一ノ声 義貞

鈴虫 松虫 鈴虫 絡繹 ありて

蝥 毛詩八卷曰七月在野八月在宇九月在戸十月在

蟋蟀入我牀下 宇ハあきざれの落敷邊と云又順
倭名ニ宇ハ門屏ノ之間也云云寒き多ハ十月ノ
床比邊へ来て啼也温なる間ハ野ニ居也

綴 救虫

促織 蟠織虫 鳴聲 如急織機 故以テ名之 順倭名

蟋蟀

蟋蟀之非同物其形ハ似て声ハうつれり蟋蟀ハ清く

藻住虫音鳴聲 ちとハ秋也りふすじ虫とてりし難かり

我蛻云云虫ハ藻よりつる小貝也水辺ハ

なとてハ秋也他准之入の 虫とけらハ親ちり 流布

蓑虫音鳴声

温故日録卷第八

葉月

北野祭

四日 北野北天神の御事ハ人々これあまらる事
 聖北御門右大臣從三位菅原朝臣（延喜四年）昔延喜の
 らせりふ沙又ハ參議從三位是善卿と云ふ時
 泰四年正月二十日因（延喜四年）尤（延喜四年）僕射藤時平之（延喜四年）讒言被
 貶（延喜四年）論太宰權帥（延喜四年）筑紫へ赴（延喜四年）其外十二人（延喜四年）於
 之二十七日（延喜四年）左遷（延喜四年）其延喜四年二月廿五日
 配所ありてはわふ（延喜四年）讒逝（延喜四年）其後天満天神
 中（延喜四年）なりて天下（延喜四年）を（延喜四年）延喜乃沙時
 より（延喜四年）天神北御靈（延喜四年）とて（延喜四年）中（延喜四年）にお（延喜四年）

温故日録

十五

事とていへば延喜二十三年四月廿日
よ宣命を下して贈官贈位ありの事ありと
昌泰四年此宣命をくやとてくは六十一代
朱雀院天慶三年七月十六日託右京七條坊婢
文子欲棲右近馬場其女甚賤不能營備纔祠
家側同九年三月近洲比良神官良種見年七
歳託日我所居之地必當生松不幾一夜间數千
株松生北野於是朝日寺沙門寂珍與右京
婢文子勲力造靈祠次年天曆元年六月九日始
移北野也天曆六十二代村上天皇元年也天德
三年右丞相藤師輔改相大慶自爾靈威日新
きふのまかりハ六十六代一除院此御時より
つれ官幣なき祇園に於て公事根源
小定考とて委元亨釋書等よとのとてり

司

十一日 定考 是也 是ハ昔六位以上此加階とす
人しかる藝能行跡格勤とてりひく榮爵とて
きりかり上て官此東北廊の座よはきて事ハ
次母朝所小就て三献此義あり次母宴總の座
みはく又をのく三献をかさ此花瓜上て下此冠
よさる大臣ハ白菊納言ハ黄菊參議ハつりてん
其外ハこれ時のくぬ瓜はははり花よあすたこの
二月列見同式兵此兩省より諸司此輩の
上目と選成らる事此列見とよとれとてあり
りて奏すと擬階の奏とよび令とてりひり
ささりてと定考ハ中も定考と文字ハくはてり
と考定とてりさふりてり口傳とてり選叙令
よくりと事ハのせり其儀式なりハ次第小定考
十二日ハまこ小定考とて大弁以下此東廳より著る

行ふ事さ公事根源小考定是ハ非逆 名目抄

年中行事哥合み

清水放生會 十五日内裏ははしむる事なり上

清水放生會

宰相弁赤府なり男ふみひふ宣

命内蔵寮出使みり柳八幡大菩薩と

人王十六代此御門應神 天皇乃御事

仲哀 天皇乃第四代皇子御母ハ神功皇后胎中

天皇共又ハ譽田天皇と名はをなる天下と

ろめ事四十年百十一歳此寶篋とた

治欽明天皇乃涉代は始て神と取て筑紫此肥

後國菱形池といふ所み跡とさなる人王十六代

譽田八幡丸也と託宣あり譽田ハは御名八幡

ハ山跡乃号後ハ豊前國宇佐乃宮み

ひけ聖武天皇東大寺建立此後巡礼

と由託宣あり仍威儀とさなる又神

託とて御出京の後ありさやそ彼寺ハ勸請

さる後とも勅使なりハ猶宇佐はま

御時ハ大安寺此僧行教宇佐は

靈告ありて今の男山石清水は

あり後ハ行幸を奉幣を石清水

代ハ一度宇佐へ勅使をさる

とハ天照太神并ハ八幡大菩薩

大菩薩と御名ハ御託宣ハ得道

八正道垂權迹皆得解脱苦衆

とあり八正の内典ハ正見正思

正精進正定正惠是と正道と

身口ハのつとさる三業ハ邪

真なる諸佛出世此本源より神明乃密迹と云れ
 是つてあをりまうこの八方より八色乃播種したつる事あり
 密教農唱西方阿弥陀乃三昧耶形なり其故もや
 行教和尙より弥陀三尊乃つらうとしてみくも世治あり
 光明袈裟乃とまうつてせゆしくきん僧頂戴して
 男山子ハ安置トキるとぞ神明此本地と云事なり
 こそぬぬひひかりの徳と大菩薩乃應迹ハ昔より
 あまうつたうの證據なりしやふや或ハ又昔靈鷲山
 して妙法花經と説き或弥勒なりとも大自在王
 井ちりとも託宣し中よりハ正代幡表もて
 八方濃衆生と海度しよ本誓成りしく思入も
 崇敬し奉るべきとて放生會乃とこりハ元正天
 皇乃淳寧養老四年九月異國襲來此時大井
 神カよとてふやすく異敵と云らばけけりこ

のら大菩薩乃託宣母合戦乃あひとわがくの人成る
 一ぬ放生會を行へきをなりと云りし母よて毎年母
 諸國よりこの事と放生此いしき事寂勝王經
 長者子流水品乃池魚乃事よりおられるよやまを
 よいさう成るる海らひのりてうけし延久二年
 行幸母雅とてきて六府以下供奉する事よハ
 なる早且よぬのめを神興とて世路ハ時ハ行
 幸此儀式して音樂ハ聲雲とてめ衣冠のようふ
 ひ目ハカヤクそれ母ひさうく還幸此ありてハ神
 人法師原よつるまで白杖とけきてかつぬ道り
 とらうなる儀式也朝母紅顔とて世路よかこれこそ
 又母ハ白骨と成て郊原よくらぬとてせりありさゆ
 たるこれ事ともなり 公事根源

名月 月 月日

こほくさくさく 詞秋也但月次の月日
あまの日あまの秋あまの月

日たすこあまの八月次也 流布

眉 眉書

月日此影光あまの秋あり

万葉六 月あまの三日月根搔けあまの月あまの

あまの若月あまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまの

の字 弓弦 非三日月半月也 八雲の

字あまの綺語抄云いざ

あまのあまのあまのあまのあまのあまの

云云 八雲御抄より十五日以後をいふ

朝 月日夕月日

月日は各嫌之但朝乃日夕乃日と
用之説を云云 朝附日と書之 新

式 朝附日ゆふげくひたりと八只朝日夕日なり日

五句嫌也月日ハ三句をいふ一但朝げくひなり

忌なりといふ月日五句をいふゆふげくひありひの忌

をいふ秋也月日ありゆふげくひ夕附日ハ日れ来

秋あり流布 朝げくひ雙岳と云ハ朝日乃出

ひくひ月乃出をいふ朝月日なりひ乃

出あり枕詞をいふ月日二なりひておんする

夕月日も同之 半月と云六日

只桂枝花と云秋之 毎言抄 然るを或抄物云

後撰 云々

と云ハ此哥を證哥として花を春と桂實

三五 秋と詩より秋ハ實をハ秋ハ定之もの也但

秋と云ハ秋ハ實をハ秋ハ定之もの也但

中云哥をいふハ可隨所好云云 尋其義 非也 只秋也

八雲御抄第三下云かつれ花ハ月日なり同抄

第四云秋と云ハ秋ハ實をハ秋ハ定之もの也但

是ハ月乃生と云ハ實もあはれと云ハ花のや

よらと云ハ秋と云ハ秋ハ實をハ秋ハ定之もの也但

説々難決只桂

乃花ハ秋なり

注云南洲ハ桂樹あり生胎中月満ハ則桂乃生也

同注云月中玉兔あり月陰之精成獸兔よる

て獸乃形と云ハ陰乃類也故ハ月ハ異名也

奥儀抄 月ハ陰精乃宗也精氣法をい

て獸乃形と云ハ陰乃類也故ハ月ハ異名也

十五

十五

月よ衣之くく六日は二句可嫌之くく八可為秋新式
是して式乃月とりくく幸しありし 流布

し出塩 月れらけと塩此浦干と同一事なり
月乃初る付さす塩と月此事一なり

又月のかさぬとしてしやくし事なそれ八への字とす
難波くくちりくまは心のふ初る月えらよるか

月の望とハころとふあゆし 十五
日ハころ也故といつて秋ハ雲御抄下略
し都 月宮殿 此事

し晶 秋也月さし
てハ冬也
し友
し主
袖 旧よ
袖乃

月なりと二句嫌とくく袖はなとる月なり
し袖よくく月なりハ猶以くく也 流布
し鏡 鏡似

と云也聖廟後集日月顔似鏡
無明罪風氣如刀不伐然

初塩

吳王臣伍子胥靈作潮每年八月十五日高漲
也方輿勝覽一曰吳王既賜子胥死乃取其屍

盛以鴟夷之革浮之江中子胥因流揚波依
潮來往蕩激隄岸勢不可禦或有見其乘白

馬素車在潮頭者上因為之立廟每歲仲秋既
望潮水極大云仲秋既望トハ八月中也子胥死

ニサニニ告家人曰扶吾目懸東門以觀越兵之
城吳乃自頸其屍ヲ鴟夷トテ皮袋ニ裹テ浙江

へ捨タリ浙江ハ杭州ノ錢塘ニアリ錢塘江潮トモ云
猶史記六十六伍子胥傳委或詩下千里色

中秋月十方軍聲半夜潮八月十五日の幸
なれども少前後

しし用其事
も有之 流布

擣衣

八月十五夜に始て打也其前ハ不詠冬可詠る
何難欤ナニトシテカ源氏よも八月十日よりひきねるるれと

こいり十日よりひきねる

礎擣衣石也字亦作礎順倭名

余則也八雲御抄

駒牽

十六日 駒迎きり信濃乃勅旨牧此馬と六
十疋をもちしとふは十疋りしとゆりくも朱

崔院乃清國忌みあつるによて十六日よかりける
牧より駒ひきくすつと云也天皇南殿より出御
なりて清馬と清後と上り清馬解文と奏す次
事して公以下次者よ清馬とゆり馬おさる
か公とりて清前よすしと一辨寸取のこりぬる
とハ三別分濃使として次おはりて院東官なく然久
きとぬとへする
公事根源 切原駒とこらも秋の御無言抄か
とこえくしり但ひくもなく

拾遺てハ秋みなりしゆりまのくいつり可隨可好
あふ取のせれれ家とをなかりしをさつるきりりれゆ
りしゆりし秋の哥し

甲斐駒牽

十七日ハ又甲斐國乃穂坂乃御馬とひく
公事 年中行事哥合注三十疋をもち

武藏駒牽

廿日ハ武藏國小野清
る四十疋ひく公事

信濃望月駒牽

廿三日ハ信濃望月
御馬廿疋公事

武藏立野駒牽

廿五日 拾遺抄 十五疋其外襖又御
馬廿疋毎年奉る公事

上野駒牽

廿八日ハ上野ノ御馬五十疋ひく大
昔ハすづく月日なごさひる事ハなご

同く御馬數百疋まの事してゆきハハはきもり

八分別す人さる但連哥

花野

よハ折まうせして野花秋

薄

なほ三月よきてあそふと云説あり但ちよある事
ハ八雲御抄よ秋乃未よち小初る云云後撰よ薄ま
らぬとつり

花すはれおやと記まをれふあんとハ秋まなく

薊

秋也薊とつれは色ハ名よ名
きつらうや清涼殿の北の二すの前
尾花 薄たう
そのこ落の

かこと袖中

抄母あり

萩

一殿一戸

秋也萩とつれは色ハ名よ名
きつらうや清涼殿の北の二すの前

乃れどよしてゆくと年中行

萩と鹿鳴草

事嫌也

蘭

古今集物名よ。らぬとある是也野宮此哥合り色

此系蘭

草じり母又秋とらふるくわし一題の根よらぬ

ホシ 本草云布知波賀萬。新撰萬葉集別用藤

袴二字とあり。又別よ藤袴あり。花下野似

て色紫也。白ひたり。二草一名あると。但詩家

よハ二草とらふ用らあり

苧

三月みりてあそ

葛

一花 玉真一
秋也玉卷
葛ハ夏也

紫花

紫乃色うらあそ
しつと秋流布

紫莞

古今物名

鬼志許草

こころり紫菀也綺語抄
奥儀抄至名扱袖中

抄をよんさぬく乃儀あり

穂蓼

蓼多花

蓼多錦

蓼多紅

新撰六帖衣笠
内大臣哥云

蓼のよほれちりそねみ夕日さひりさ秋のうらや
かきこもり引并そちちりよ合らる證并引付合はる

葛

ちりともちりともあく
ても秋たり流布

萱

かや軒端秋也秋母あすすと云一説あきとあは
るもかや流布かや萱も秋也植物よ打越地へ

茅

萱よハあす只茅と云と又説よろやと
云物別あり云是雜也又茅と云と

いりちりらちりやハ秋也かやちりちりやハ別也六帖

又新撰六帖

も別よあきと

草色付

叢色

色種

秋也種々草也種の名と書
也と云と云と云と云と

守田

植物よ
赤越也

田庵

居所よ打越嫌也新式田と守田
くらり作りてと云らるれ庵なれ

秋なり植物小

川田

植物よ赤越

田色付

案山子 驚鹿

僧都

非人倫 新式山田れと云と
云事ハ玄賓僧都よりかこれ

宗祇古今注
白くれ類何も植物よ赤越嫌也流布 案山子と傍
都といハ板ハ板よよ成しよひとて引鳴と扱
別也 引板 云言抄云ひよおとあしと云とに田と

五抄の委連奇のいさやれ差別不入り新式よ
極細くともり載るう人ハ秋よえり成と心得うは
いりりりり河の柳の奇。頭宗天皇御製也
在日本紀十五卷。世奇河傍柳とある神也
又六帖中此御製下句とありこれとそ乃
根絶せしとありて貫之奇とあり

稲舟

頭昭云いなりゆの稲舟つとてきる舟はいなり
り川へ出羽國上郡ありこれ郡よりなり
きこれハどき河とありかの國の館乃主人よりなれ
その川より郡これとハ船ははるく館におこ
りなり稲舟はとてのりく郡の稲舟ありけ
きハのりなり半なりぬハのりハ下流ハハ
いりしと人なりふいなりと云くはこれ人なり故云

好修理大夫の奇よ

志川川の川田よあるいなりは人のいなり
とよる又川のくやして船のくははるふと
りふなりよの免それと云半也和語也
い稲舟は免る舟と云童蒙抄ハハのつとてきる
舟とてい又のりる舟からとゆるとりり委也
抄され乃定去委也奥儀抄ハ頭とありと云
古義とひもり袖中抄取要記之世説と事
とありて一とありす但連
奇ハ頭昭乃説を用りり
さハ稲のなるこれ神也雲の
さハのりなりとひきおあり

稲葉 稲葉雲

稲干 稲莖

稻垣 穢詩

稻穗波

稲よかきり
サカしよあり

洛穂

小田初穂 富草花

八雲御抄より云々あり梁塵愚案抄より云々あり稲の事

とあり然ると藻塩草云檜の異名と云富草と書但稲ハ云々云々と檜ハ云々草と云々云々人丸家集より

あそよりハ云々小田中神代巻て云々云々云々云々也
折ひてわかれ云々云々のハわたりたる云々云々の云々
又太發勿暢 小養民の戸ヤしく富草乃云々盛
々々あり云々 云々云々云々云々ハハ稲の異名あり
一又田小付て云々 云々云々の云々云々云々云々云々

粟刈

藍花

山藍の花
云々云々あり

櫻紅葉

諸木此中よりヤキ也 已説七月
り未つる八月より云々と云々

梅 黄葉

同 前

鴈

八月柳未ま風吹時と云々の國より来て二月より
云々云々云々云々云々見 萬葉 八雲
玉葉集秋上 中勢で宗を親王
下繋らる柳の梢ら云々云々秋風云々云々云々云々

又鴈ハ八月十五夜初て云々云々也と云々 凡下 常世國
日本紀 蓬萊山 同 仙境 四季の云々云々云々云々

云々云々古來かりり云々北と國と云々の鴈の本國を
仙境云々云々へて常世と云々春の子と云々母の云々燕ハ
北國が歳也 春の子と云々南と云々云々 辨別抄

初一 九月は初雁と云ふ事あり八雲御抄云萬葉よと云ふ所の初雁と云ふ事あり初五字

九月は初雁と云ふ事あり八雲御抄云萬葉よと云ふ所の初雁と云ふ事あり初五字

考つる所萬葉第八天平十五年秋九月遠江守櫻井王聖武天皇は上る所

九月は初雁と云ふ事あり八雲御抄云萬葉よと云ふ所の初雁と云ふ事あり初五字

詞林採葉抄云初雁ハ八月月中旬旬に來れ事

和漢と云ふ事舊事より但文選曰陽鳥翔以玄鴈矣

玄鴈陽鳥素問四時氣候論曰白露八月節鴻雁來寒露九月節

鴻雁來寒露九月節鴻雁來實云云

是は八月の節一雁の序多は九月の節母二番めたり毛詩鴻雁篇注云大曰鴻小曰雁洪岸一音和名加利

田面 又頼れ得兩説あきとも田此字は七句嫌へ一を

略之 一 金寒 九月も八月も一は二詞

かれば次ては變に記之秋さびささ云詞ハ八月九月が

月又ハ八月の序も今般一 春と云説さゆ

秋と云云 一 使 九つは使ハ蘇武事より

燕歸 燕巢と去も秋也燕知社日辭巢去勸為車

也春謂近春分前後戌日秋近秋分節前後戌日也五穀乃神と祭日也是と社日と云

とも順くよれよらん事と今世母定く〜只いあかりせ
もとく、秋来て夜秋の回よ鳴鳥として我々何の順
倭名序云水獸有葦鹿之名山鳥有稻負之
號野草之中女即花海苔之彙於期菜等
是也云云 袖中抄略記

鶺鴒

鶺鴒 八雲御抄云小長文ていふおせをれを記せり
いと云庭ゆゑの糸如何ゆりてきいよりゆり
いふあふれ我門よいをむりせをれなくあよといふ是も
いれまのちと心得〜但定家卿説可正説の
ちれ多く時人の家とゆひと云物伝おひく入也仍号
之日本紀母ハハレをなをせりと云又とつとを〜と
云是合文支婦是と〜と云ひきりゆり
云云續十載物名入道前太政大臣
さね衣か〜とわひをれを〜と云と〜と云と〜と云と

鶉

さねにをれを〜と云の〜と云と〜と云と〜と云と
是ハ拾遺愚草上下定家哥也支木寂蓮
女郎花わゆる野人のや〜と云と〜と云と〜と云と

鶇

三月〜と云と〜と云と〜と云と
音子鳴声を〜と云と〜と云と〜と云と

鶇

〜早鞆 俊頼家集云支木民アノ範光哥云
秋のよ百舌多れ是〜と云と〜と云と〜と云と
植物也秋也新式 志を〜と云と〜と云と
〜草莖 流布

春之在者伯勞草具吉也〜と云と〜と云と〜と云と
頭耶云こま〜と云と〜と云と〜と云と

まきまきとくもえりし人の山里はこうしむきわら梅乃ち枝茂
此外よめる哥ままは多えくく

鶉

拾遺物名乃哥也玉葉才十六寂蓮
山柄のまきまきとくもえりし人の山里はこうしむきわら梅乃ち枝茂

新撰六帖光俊哥也同集二新家
冬代めくく山連といひちりてまきまきのまきわら

拾遺物名よめると續後拾遺母こやまはくく
物名よめると古今集母こく花よちりしはくく

鶉

ちりまきとくもえりし人の山里はこうしむきわら梅乃ち枝茂
上二集上家隆哥也かきまき小名代名わくく

こいつると三五記よめると袖中抄も同
ちりまきとくもえりし人の山里はこうしむきわら梅乃ち枝茂

鶉

上二集上家隆哥也かきまき小名代名わくく

とがくてもこれ秋に他准之百韻よハ用捨わくく
こも今ここれとくもえりし人の山里はこうしむきわら梅乃ち枝茂

小鷹

狩 鶉狩 同 事也共は秋也 流布
但鶉狩ハ嫌詞也

鶉

こえりし朝こりし字入くくと秋也小鷹こ云詞本か
此ハ朝鷹かりこいふ勿論春也 流布

兎鶉

秋の巢このり

鶉

鷹よ小鳥とむきくハ秋たこハ
小名よあめ鷹わりの神 昌琢 此ハ句秋也

雀鶉

スガミガカ

雀鶉

まきの小鷹ハ
類これ秋也

鹿

三月より四月にかけて声するに鳴声等秋之生類
打越嫌よりす只ハ云々がことと云々五音通
ハ流川といつて云々やすめ字してめん
かせ兒 八雲 實名也角此を云々
師説作り 雜多云説わたりたりの受
楓 異名也とらとす
鹿と云といつたり或ハワ
鹿と紅葉鳥 乃異名
このやうな事ととり他准之かせ

社父魚

鮎カ 鮎カ

鰮鮎

落鮎

下鮎

崩梁

下梁

鱸釣

秋と云々秋也秋風思尊鱸云本説あり

秋風よすそ此勝なりひめてゆれを人乃らち
後秋鮎居れ家集より此哥此心も晋張翰と云者古
卿乃鱸魚膾とくりとたりひり事なり一晋張
翰吳人入洛見秋風起思吳中尊
菜羹鱸魚膾云事詳見夏文類聚

鶉衣

非動物新式法文よりありすくやき衣
云云八雲御抄 只及び衣の事なり但秋
ハ季と云川中ハ生類ハ打越嫌下 無言抄 鶉乃

五段

尾代より唐子と云者き初より生類
 打越もさうさう也 新式抄 是と可用秋の交
 してより糸もあり丈本ニ從三位廣範御哥云
 今ハあはれびとある里み治すて秋とさうさうの衣うん
 惣措 非植物ニ 新式陸奥信走郡とて志のぶ草と
 紋よりりさうさうさうし衣裳代色乃草木一准て
 可為秋秋可野 新式抄 志のぶ草と
 かねのさうさう秋也といり 無言抄

温故日録卷第九

長月

御灯 三日 三月のさうさう北本は灯とさうさう事也
 事根源 年中行事哥合

たひけする星はひらみまうさう事はさうさう秋はさうさう
 こと免り連歌よひおめせめくきま

野宮別

源氏聚木 卷よ九月
 七日むりりあはれごあり

網代打 新式よあはれ藻塩草よ九月九日代前子打
 初て宇治代網代人供御よさうさうさう又あ
 一ろハ宇治よかさうさう田上よさうさう内膳司
 式云山城國近江國氷魚網代各下處其氷魚

始九月至十二月三十日供之今業近江國田上の網代よもれり氷魚を山嶽代守治してとるなり

重陽宴

菊花宴 菊盃 重陽こり八九と八陽教

月九月ハ節日としては菊ハ菊花乃宴行り是と重陽宴とす九月九月八月とりと九陽代教よ叶く少人ハ重陽とハハ昔ハ天子南殿よ出御ありて節會行り上達部清子らとりて其道のハハ探韻行りて文臺よすくがて十月旬のよあり今日も氷魚とあり例あり又群臣ハ菊酒とたまふハ五日ハ會おたり清帳左右ハ菜菓乃囊とけ清前ハ菊瓶とをく又ハ菜菓ハ此房とけて頭よさく其ハ悪氣成るるといふ本文あり續齋諧記云貴長房

謂汝南桓景九月九月汝家有灾急令家人縫紵

囊盛菜菓係臂上登高飲菊花酒此禍乃消

こりきれん其日よとりてをいれとてハ其身ハ

清りたりて家中ハ雞犬羊こりて死たりやうれくのりゆふよとてよハ山のかり菊酒とるとて菜菓と用り事といひゆり年中行事哥合重陽宴哥菊りらけり氷魚ととりてをいれとてハ此のまら

煖酒

重陽宴よりあつめて用り一条冬良公此清説よとる

菊

ハ九日よかきすハ雲御抄よハ菊ハ万葉よ不詠飲寛平菊合以後名物よはあきとてハ誠ニ見し着綿 源氏幻此巻なかに九月よ成て九月の

菊ハ花を霜よあてると花乃色くよとて菊

花はかりふ也云々一条冬良公此傳説は菊よりことなる事ふつ此はしるしをもちてしるすは菊は菊とつらふん云々尤可守也昔りの或書は菊は菊をあてどとして八月より綿とさすは但不咲時は菊は似てく當日よこすは也巴説也云是は不忌信用物也

菊と菊草 ふと

幸連哥よ嫌ぬかり

淵

水邊也 流布 拾遺

他准之 五言抄

集元輔哥

我宿の菊はあつちきふてに光世にそりて淵とかりん仙宮の菊の露ははけりて淵とかりん事のこと也真儀抄 是は南陽の麗縣とふ所の吾らとかりん取羨也其山此との菊水あられとかりん古事とかりんらとかりん朗詠文は谷水洗花波下流而得上壽者三十餘家とあるも是也其古事れんとかりん

宿れ菊れ露とかりんしよほとかりんかの形谷の水のしよ淵とかりん也此哥よりかりん

殘菊

九月十日より残菊れん秋也 流布 哥れ題は冬よもせり

例幣

十一日 一日よりをふりて僧尼重輕服乃人參内也是は大神事ある也 例幣とは

伊勢太神宮へ御幣を奉りて毎半年此事をふりて例幣こかり也昔神祇官へ行幸かて御幣と請りていつ使の玉御馬院奉りて常此奉幣乃こ此奉朱菴院の御時より一多りて今神風伊勢乃國は御鎮坐ありし事と思ふ由垂仁天皇二十五年三月は倭姫命

のきへみよと五十鈴川上は神宮と云くられ
て外宮ハ内宮鎮座此後四百八十四年と云く雄
略天皇此時宇治跡をこきさせ給ふ養老五年
九月十一日よとくめて官幣を奉るは公事根源
長月やとくは幣手テよといふもあはれあふやと云
年中行事哥合あり拾遺愚草負外上よ
えとくられやいす此は母山よりしらぬまやま
をともあり是と連哥よハはふすつりあつらん

住吉市

十三日 拾玉集第三三慈鎮ノ哥よ
あつ月ハ月のもあはれ恒吉はあつし人をさるなり

後名月

二夜の月後の今夜の月
あつもこれ十三夜のこと

桂川御禊

西川乃御禊也源氏柳乃巻よ九月十六
日よ奇官乃西川よと清禊一のい

本也幄乃巻よ中臣御麻と奉る事あつらん
明星抄よとくり野宮御後と五言抄よあつらん

是秋拾友抄よハ赤宮禊晦日とあり可尋

撰虫

是ハあつらん式あつらん殿上乃逍遙とて
殿上人よあつらん嵯峨野あつらん虫撰

よえとひ入て奉る是ハ堀河院乃御時より
おつらん松虫鈴虫あつらん誰人も内裏よ又賀
茂社司をた御られてもあつらん
公事根源 年中行事哥合よ

露霜

露時雨 此ハ二色けさしてハ秋也けがらずとも
乃内よむとひとハ秋也露とむとひてハ初霜と
りも秋也露霜乃さむれたるハ秋なり
但露乃早あつとも雪氷の字あつハ冬なり

霰雨こ よ冷しきことじ
すじく秋也

時雨とき よ霧をといつて秋は道
具はもひて秋は流布

霧きり よ霜とひをひて
も秋也流布

露寒つゆ 將寒まさ 眈寒とん 兩説をりぬか可用
也 孟津抄 咲花抄同 漸寒ぜん 秋あき

八月九月もろろ新式抄 源氏桐は下は
野分だらしてかろくささしよ云野分八月の物也
秋也夜とさしよことりて入ての
冬也又寒夜長かんやながのさしよ皆冬也

あまけさしよ今夕
おさしよハ冬也
鶏皮けい 身は毛ぶら事之新式抄
よ秋かといり源氏初音乃

朝寒あさ 秋也流布
さしよ朝あさ

巻よハ名やちりて我がろささしよにぬけはささしよと
正月の雨はあつと若菜下よも冬の前よえささしよ春
秋冬共よ云詞とささしよも連哥よハ秋たりと昌
程のいつり霽寒はら 惡寒あく とささしよ

琴の音れことらぬむむとささしよのよならぬささしよ
堀川次郎百首後頼哥ささしよ五音相通於吟ん
依物不可為秋之由雖在二儀秋之季大切之時強
用之事實有例 新式 おさしよささしよあり

それハ非秋といり不審也
只ひりり秋とささしよ流布
死鳥鴨し おぬ冷ひや こと詞ひす

ひくハ秋也 毎言抄 漸寒夜多きひや才あむむ
のしと衆とささしよ同前凉引暑れ詞を添さハ夏也

長夜なが 八月九月正長夜千聲万聲
無了時な 白氏文集 聞夜砧詩

無了時な 白氏文集 聞夜砧詩

無了時な 白氏文集 聞夜砧詩

冬邊

待冬

秋邊而

秋盡

秋を盡くすとも秋を盡くすとも猶さしむ
松風をくも同前秋より乃らりもく

りつる山をくも云句も秋也他

准之流布 四木子とくふたね

山色野色

植物嫌打越但依句躰也新式句躰

よよとくもハ雪霜乃らるもは野山よじも
植物よ不嫌野山れをけく神をれはとく
とせよよよも秋植物よ打越也流布

野山錦

野山紅

山よよあふ嵐哉 紹巴
と云句れ類秋をら

時雨 漆山

夕雨ハ山や下その時雨 宗祇
くひあけ句を引よ甲らりもも發句乃

たりろささゆもくわくして
一筆とくくくくくくく

枯野露

秋也新式枯野れ露氷と
色このふ字わくれとれた物も依じとく

枯野

虫

てハ秋也秀とじもしてハ秋也 流布

裏枯

草葉れとく色せくわく事くくくれとくくハ花
園野邊原庭をの文字入る也

草枯

草は花殘秋也 新式枯野は花の跡も同前枯
草こんくハ冬也花をくじもくハ秋也わく菊

此色たもくても秋也名草れわくハ冬たれも花と
とん色乃字くしてハ皆秋也 流布

尾花枯

すくなく秋に新式抄 宗牧句よ
おれの尾花よのすくなく大發句帳秋の部有

枯薄穂 枯荻穂

薄散 尾花散

蘆穂 芦穂綿

秋也 芦穂もあつて穂あり 葦の花

忘草

肖聞云忘草 忍草ハ一草二名也 綱疑抄
云忍草此草 兼載 聞書は穂トて昔より

忍草 忘草 同答 ちりさりと草此らちりさつて

子て詮をくく一草二名也 比分りて一垂トて
忘草と忍草もあつて忘草此草の名と撰つてきれ

比哥一草二名と云くくり續古今才十五段二位

顯氏哥也本草垣衣和名之乃布久佐

龍膽

衣夜美久佐 倭名物名よより古今物名よ
我宿此花をくくちりさつて忍草と撰れや

川上よいまりりらん細代よハまりりらんやらんこすん
風さしちりさつてらん声よらん衣とまりりやらん

新勅撰物名伊勢哥也但物名此外よめり
拾遺愚草負外上よ

此れはちりさつて候物也方々此秋ハ淺草生の里
此外古哥よ多わくしてよめり基俊此悦目抄よ
らんごれ花をくくちりさつて法師の強よきハたれりり
と誹諧哥よよりあつり

思草

乃辺乃尾花とての思草今更何れあつらん
右思草ハ草の名よハあつてすくなく草とて下

拾遺愚草上下

おれよふちりさつてれりり思草ハたれりり

古今事十一
秋のゆくもくもふちりつは花のさうやあんあやうとど
右尾花よゆうつと咲花ハ定家ハ龍膽乃花此花れ
よのうらとつとつり以上訶林良枚暮秋の物也 流布

我毛香

じさうきう 我毛香は秋もつれもせとら白ひのき
うらとらぬと云草也と云説あると道春野植は別

晚稻

オクテ共 穂もつれ 室此晚田をくかあり
暹稲乃小田也

穰

唐韻云 穰音呂 後漢書穰讀於路賀於北俗
比豆知自生 稻也 堀河次郎百首 穰を用ひ

或ハ穰もつれ

霜

は刈田かりと云て
も秋也 流布

草駟

草 夫木燧山ハ草蓮
松のつれりゆきは草と神もつれつと山替り此

紅葉

よ時雨霜とじとひ
も秋也 流布
色 栲 たりとても秋
也色こ云字

入てハあひの

川 ちとてハ秋とらハ冬よか
秋ハと云ハつとつり 五言抄

紅葉のけの水よつる 神さハ秋たらハ冬よか
さるも神さハ落葉の事さるハ冬さるハ一尺向
神ハ随一と或抄よつり 但かやの事 連哥よ
ハ或ハちるちるもつれもつれハおさず 落葉れん成ふ
くもあつたつりよハ冬よあつたつとつり 他准之哥
ハ別也 但是ハひとハ落葉也 猶人よとつらぬハ

水 同

且散 秋 色 散

紅葉乃ちとら
冬ちとらとら

色 露をじとら
ハ秋也 流布

乱而 秋

葉雨止降

古今ニ云亭子院代御屏風代志は川とてんすと
能人代もとのちる本代はたじま代ひとてぬとて

後拾遺秋下後撰秋下 秋の末よるとてきこしてちりつらハ風よとてちりつら

後拾遺秋下は月前落葉とてふ云

是これ秋の哥よ入と但連哥よハ紅葉のちる幸か

きは冬とて一秋句神よよりて

秋もとて一秋猶可尋之

源氏角総よ紅葉代とてちる再代とてちるのふ

船と紅葉とてかざる是を例とて七十二代白

河院兼保年中大井川の行幸は舟代紅葉とて

かざる 花鳥 一棹 花よつらる紅葉は丈夫は代代哥ニ能

大井川にける紅葉代代とてちる代とてちる

同集は落葉代代藤原基輔朝臣

黄葉ちる清瀬川とてちる代とてちる代とてちる

是ハ紅葉代ちりかちりてちる代とてちる代とてちる

改た大臣

大井河風代志とてちる代とてちる代とてちる

是ハ冬とてちる代とてちる代とてちる代とてちる

初一 或抄ハ八月の部よ金きり八月より

遅一 此句よとてちる代とてちる代とてちる代とてちる

是言抄は嫌詞とあれとてちる代とてちる代とてちる

此句よとてちる代とてちる代とてちる代とてちる

又それちる代とてちる代とてちる代とてちる代とてちる

そのことより此注はけさして無言抄なるともあらざる
こととてりた古哥よそへハ唐乃文と正説と用
らるるもの之柏兼名苑云柏一名掬百菊二音
和名加閑玉
篇二柏栢同云云

今按知松栢之後彫こわくは今本朝は哥よとむ
うハとく別録字書二拍檜同を〜〜〜〜〜
拍檜栢各別よわげ〜〜〜〜〜
解之解 唐韻云栢音帛和云云栢栢別よわ
和名加之波 又唐韻栢と引て栢は尺一合せぬれど
栢栢同欵人ぬ訊へ〜〜〜〜〜
よめ〜〜〜〜〜
家長朝臣哥云
夕何あ〜〜〜〜〜

又丈木秋哥中後徳大寺左大臣

ち〜〜〜〜〜
壬二集中下紅葉哥としてよめる家隆
長月は阿あ〜〜〜〜〜
か〜〜〜〜〜
吉登川者〜〜〜〜〜
其外ハ此哥は〜〜〜〜〜
と然者可隨所好欵但袖中ハ万葉は哥と引
てとれん本あ〜〜〜〜〜
秋ハ月〜〜〜〜〜
秋ハ惣別乃菓秋也流布但

木實

推

秋也推柴ハ秋也ひりふた〜〜〜
秋ハ只ハ非秋と云説不謂〜〜〜
秋也實ハ勿論秋也流布

椎ハ紅葉也ぬ木なれども實故其名をとりてあつふ物
なれども椎ともなりも秋也柴も葉を秋也堀河次郎
百首六日番哥合なりと云椎柴冬乃題よ出せり
其故りや冬といふ一説ありとも連哥よハ秋也

落粟

粟ともなり
も秋なり

榎實

秋也榎といふ
つらハ雜也

利木子

花ハ葉也只利木ハ雜也實ハ秋也 流布 其月くよ
これいふよきて入他准之西行家集よありてよあり

榎實

新撰六帖知家
乃少くもぬぬ之のハいつくよめむらけりけり

同集信實

乃のれぐえのつらむらひりきて本林之れれをぬきぬ

榎

思しんともろも想とすなれんともろぬきかハあつて
是ハ拾遺物名よこらこころ橋城よありて又西行家集

山つらも名よありてありてありてありてありてありてあり

胡桃

新撰六帖ハ姫越桃なれどもあり
此外の本ハ實よありてありてありてあり

霜踏鹿

なれどもありて
も秋也

殘鴈

秋也歸鴈乃ありて心なり一向不謂越路よありて
とそくありてありてありてありてありてありてあり

也哥よハ冬つらるる鴈もありてあり

千鳥

鴈よ結ひつらハ秋也 新式又千鳥
よ露ク旁ク成むとありてありてあり

木枯渡鷹

秋代末よ來るる鷹ハ事也 三智抄
草なれとありてありてありてありてあり

衣擲袖霜

夜うして
も秋也

衾

よ露とじとひてハ秋也
流布 冬と云説不用

一重綿

新撰六帖知家卿
秋來る衣の衣はひとていふよを衣の厚い方なり

ウ

ウ

ウ

